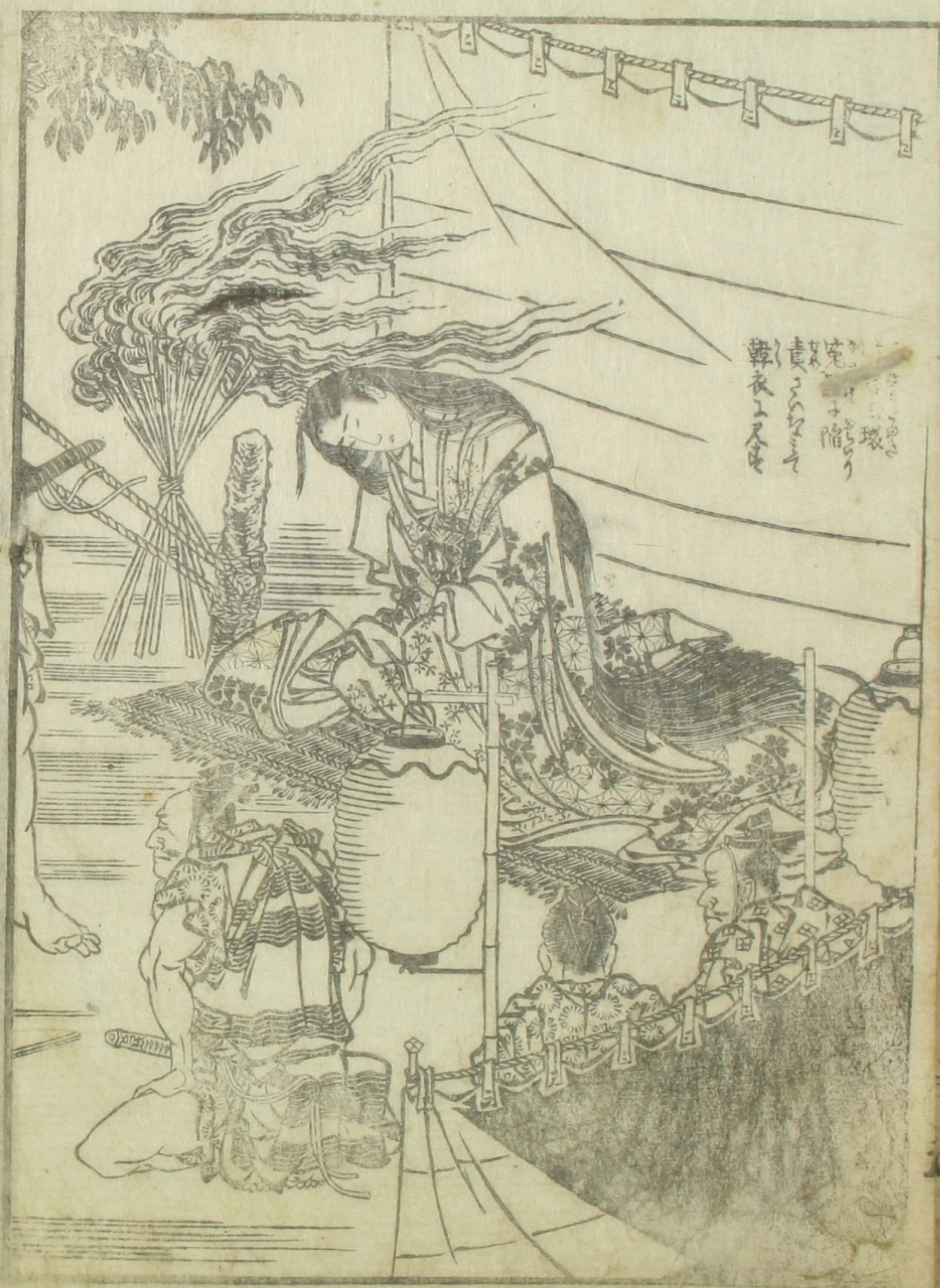


翌日け君王環二人をゆして韓衣ともふ宮仕して姉妹の如く  
らひしれどそのるよ関ざるるありはと詰問へども終なき  
るあはれ何と云ふべき涙よられて口ごりいひき詞さか  
よ疑はれやまさうていそがれはとせきうで置べきうとてけ君王環  
二人を檢非違使に渡しけり白雲の流石よ上皇の御寵あり  
ける者之多の人よえきまきよあふむとそ夜ふ入るを待て二人が  
衣とちごりあく利取て裸體とす本の枝よ吊咎うちわびて  
しつ責さいなき韓衣ハ皇胤やど居きハ産人までハとそ  
のころふ居をきてこれとえき二人ハ濡衣ハ忍ぬれどひとの衣で  
お身よまさるとも始ハとらじとあきうなく後ハとそよ志の

びさささささささささささささささささささささささささささ  
くひくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひ  
て仙家の雪の紅よりうりて韓衣ハえどととれどととむ姿  
目よえきうて心は徹ゆるととれど叫ぶ声耳より入りて  
賜と穿しめいひも身よそそとととととととととととととととと  
あはれ修験者のよとととととととととととととととととととととと  
訟もど原檢非違使の車美福門院の内命とけられ  
聞も入れどいり上皇の寛獄あると知りありん凡罪ありて  
不首伏りので責問ふ其情安といとせんとのみちの疲  
ハ薬とす三四日もいりてをて氣力原よりうりて時をまちて

又責問ふるやちるをてこれハもあより寛罪おなせたるやうそ  
日殺まらんやどハ上皇のさとりあふるもあふべし一日もく  
あまきのよせよそのみちなれハ魂ざれど薬でもふらつても  
このかゝるれハけ君王環の二人ハその曉天血を吐て死ぬ韓衣を  
もんとて盗殺させ自盗するありさるやうなしてそのお  
守護の士ハおつらつら罪とて禁錮せれどやめりてさる  
功勞もあまきし衛府の尉よさるこ其夜二人を責殺しつら檢  
非違使の軍も非次爵を賜りつらこれ皆美福門院内よ機  
関の糸を操て詔使の偶人外よ動ちるべし上皇ハ三人の女  
一夜よ死て支流既よ絶て水原を捜るるやせりしやハ新院  
帝

と深く疑ひあひ子とて父よ刺客を用ふる人の心よあ  
とて三人の尸をひつらつて清水の丘のうらつら埋  
けり生塚と呼させあふびる波にまてより方々の中い  
むつやしつら二院侍賢高陽ハ悲し新院ハ懼させあひ美福ハ  
喜び上皇ハ怒りあふるハひつらつて斯心のさめりつら  
こそ世能なる韓衣よ友成の短劍よへる修験者ハせりも  
あく暴よ富て西の京よ家居いららよ住はし妻ハ美服を  
てて大路ゆりあつらつら二三年をさる東山のたえの  
るさ夜よ入りて清水の丘のうらつらまでハまてつら  
まろしつらつて俄よんじなひぬえ奴婢の告よ夫の修験者



寛政十三年  
八月廿一日  
韓衣之屋





より鮮血迸りて死居たり。訪来りし者も内は男女の叫ぶ  
声して物音騒がよ心あやしひ門の戸お破りけありさるや  
えてともお狗ぞど跳せり。衣服錢財のころりやく奪ひたり  
盗賊の業よまはまりぬ。されど斯をりつよいまり捕殺  
らん何故ぞともおひそくれむと。西市正に訟て次盗賊追捕  
ぞ致ひぬれど。さるる照抄もたまきふりて徒死となりしと。  
故ぞおりし者ハけし妻美福門院よりさらされ韓衣よ劔で  
増すそ禍の根ぞ栽枝葉け君王環よおよびて三女一の馬鬣松  
のあるごとくなりし怨鬼のなせるごとくま妻が死せるさる  
のちおごらぶるぞえとやとひそくよける詰りて子才婦女は

いすしある話柄とハかりぬ。身修験者として自の災と禳  
あつとど人の災と禳よ違あらんや。方伎家の酒色よ溺て命を  
縮とらひとやりのまきさるての人多け病あぶ。唯陰陽家のこ  
身の上不知よハあつとるり

早黄葉

近衛帝と稱し奉るハ鳥羽上皇才ハの皇子美福門院得  
子の所依よて太永治元年三才よちりせあふ時上皇の所をり  
ひよ所見崇徳帝才三才よちりせあふせおろし奉て所即位  
めりしより。お續て宮中怪異多ししが中よもむりしハ

三女の天鶴と化て近衛帝と脳話  
一箭の誉妖と除て獅子王と賜話

十五夜よわくせあふ仁平三年春の季より夜におびえさせ  
 めるありて北嶺南都の高僧よ勅していつせあひれと  
 其験をうりり内脳ハ申刻をりり北ありて寅の刻よりふ  
 東三条の竹林の方より黒雲一群立ちまゝて御殿の上より覆ハ  
 必絶入あり巳の刻よりいばおこせあふ公卿詮議ありて去  
 寛治の頃堀河帝斯根よおびえさせあふありしハ前陸奥  
 守義家朝臣南庭よ立鳴弦三度ありしハ内脳おこせ  
 あひ例ふりて源氏の武士あふりてその頃弓箭より  
 て誉高き義家朝臣の孫石川左衛門尉義廉とぞ徴れり  
 け義廉ハ義家の子為義の才右兵衛尉義經が嫡子よて

河内國石川郡を領して代々弓箭の家なりしれとて勅せ  
 蒙んとおびえりけぎ四月十日をり獨子亭の庭のお花  
 の盛あるよさむむ子親待とハやよなる夜のありいと  
 く更て月ハ雲より風さおとしまり燈火打消しぬ人も  
 のる燈火をそと消しどころあるものあり自らんとせりよお本  
 垣のありしころある枝の細やある声してゆえまのころは  
 ありとせしといふと誰とやとえられバや傾て雲よ透る城  
 影よさざらやと祓ど色青びれ髪乱しる女の三人まで立双  
 びるよ声効て蜀帝も志のびるせぬといふある人の亡魂のおと  
 ころよと問ふ一人の女側近ありまるといふや義廉主



このまじりま  
 此君韓衣  
 王環三人  
 の死骸を  
 いづら  
 埋て  
 けめつ  
 昔生塚  
 桑く



け三人ハ殿の叔父十郎義俊がりととれりて殿とハ従父姉妹  
 て候ぞや人生ておろろめも死てハ必其のりて聞ハハいつり  
 めりて妾三人ハ原三兒ありし母上浮橋と長節竹とよび  
 て家よとめり妹浅茅小枝の二人ハ父ハ父ハ隠して人のめりて養食せ  
 めりて五年父上父まよりめり母上妾と携ててさるさるよひ  
 あひしが若き時宮仕せし所縁とて関白忠實公のめりてよより  
 長節竹とめりてあてけ君とよとせあふ十年あふ母上父まより  
 めりて時よとめりて二人の妹めりて告めよ今日まであせりぬ  
 らりてさよとて今ハいつりてさよとて問ひまめりてせりて三つ四つのは  
 まてハえとてし物なごもむりもいつれどそのうちハ養食せりて者の

あつは行方忘れさとのさよとて三粟のふりてハ何地ハ生ハ立  
 めりてんとむりしりしも神めりぬめりてせんけ二年めりて同  
 上皇ハ宮仕して同胞の如く語りひなごりて韓衣ハ浅茅玉環ハ  
 小枝とてまことの同胞と不知りてさよとてさよ玉環のさよ人の  
 語りしと聞ハ父上父まよりめりて一年ハ母上無益のりて佳代  
 なりて半ハ二人と養食ひる姫と強めりしは姫ハ養食べき儲とて  
 その銀とて田多くとりてせよとてさよとて二年の後姫が子  
 所の掟ハ背とてありて追りて姫も老て子ハ離れ住りてべき  
 よのさよとて新に養取ると旧く取付へりて田と鬻りて銀と換大  
 和らる甥がりとて往人といふと出りて其夜剪髪し出令姫が子ハ

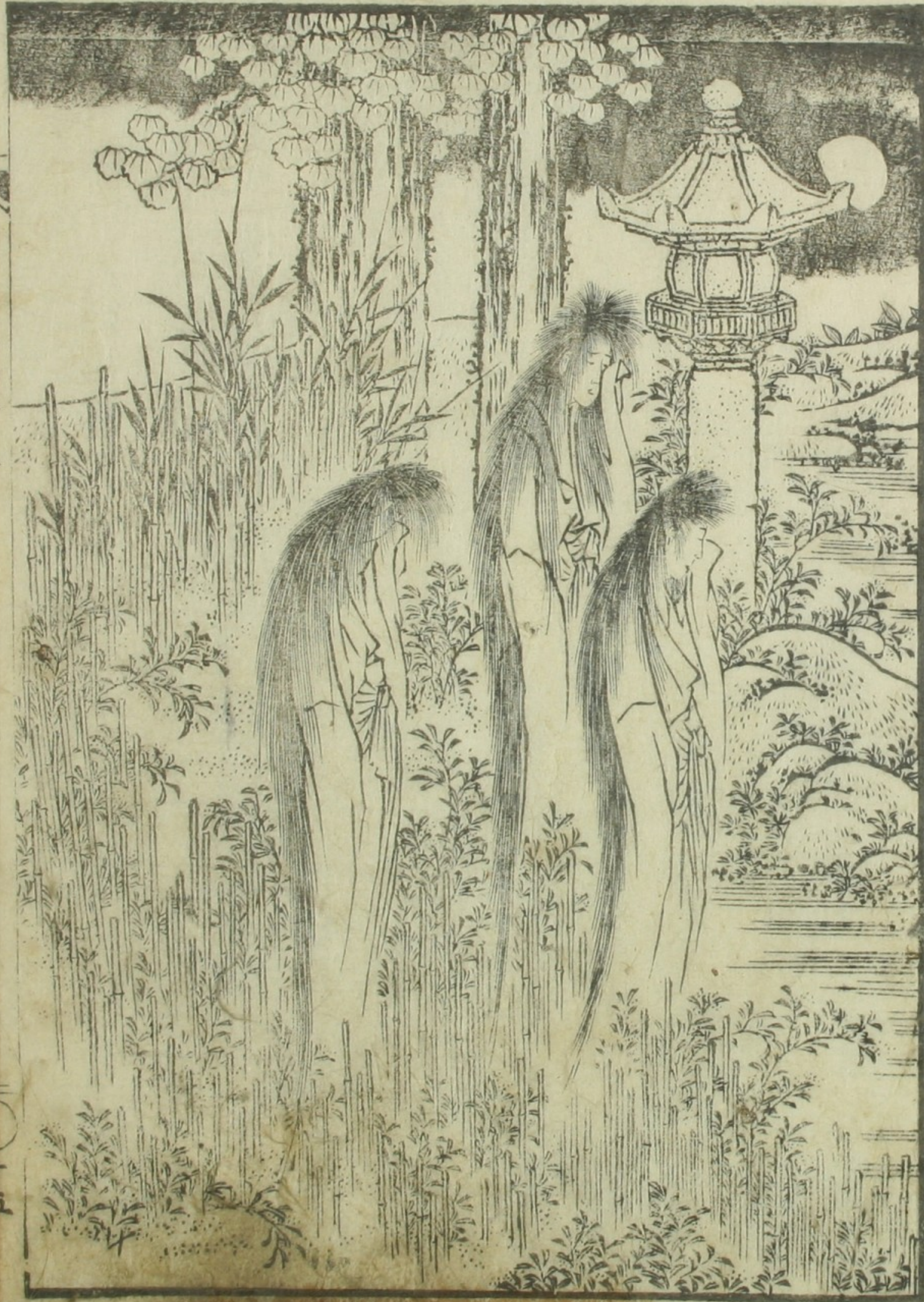
時殺す銀と妾とハ奪れぬ妻いとささたれと不醜とて人と  
 わらうと白拍子あどよせんとやのつくしと月と其盜賊ハ母上の  
 才天時信俊があれ果とハ誰かかん妻十七とのの年ハ侍賢  
 門院容儀のまらぬ女と徴めふと信俊主ハ姪ともかうて  
 多の貸せとりて宮仕させたりやが小枝とあつて玉環と号  
 あハ韓衣いふ彼姫妾と携て大和ある宇陀郡に任るるがよそ  
 たる恨ハのころあ人ハ奪れ甥の養と受ける勞神のつりてや  
 妻が六七のほどあまりりぬ甥なる男も貧乏さうらふ二人と養  
 ひて年貢の未進多く債の方よやむるあく妻と江口神崎の長  
 がりふ信人と誘るるよ待賢門院神まうでいあま行ぬ

奉り宿世のえふしよや目よとありて多の貸し驢ぬ人  
 名ども浅茅と改て韓衣とあづとていふも二人とも鳥羽  
 上皇よあつて寵遇あつてなりしと美福門院の妃ふくあさ  
 ましきめのとてこそ恨しき妻ハときて皇胤やじとまつり  
 腹あつて皇子よあつてき術とて修験者のよとる劔と君万  
 歳と雕とていふていふて肌身とあつて懐ませしより寛  
 罪おひて後られとて自絞るといふはあぬしや人の  
 よりくらあとも美福門院の残忍あつてをうたがうとるべき  
 君玉環ハ毒殺され妻ハ絞殺されとる濕香とあつて親と割  
 劔とて罪と陷るとして美福門院の毒悪よりなりて



上の全謀よしのまことのあつざらんや源平の武夫多中むけふおちまかちは選えらび出いさるあはれいの辞い
  
 あふとも面目めんがくハ世よはるどにあふこそ。妾めかけ今いま斯かくのさぬしき文ふみと
   
 わりかぎり終はつせよありし血脉ちゆうまハ志こころきさあつハび義廉よしかん眼まなこ涙なみだあふ
   
 ぶきき弓ゆみ箭やの道みち人ひとは讓ゆるべきよハあつざれど三人さんにんの悲かなき忍しの情じやうと
   
 聞きが上原かみはら未まおひつりものバ今いま度のるハ辞い奉ほう人にんさんど源平げんへい
  
 人ひとよさのりしうらむど僕わがよまさる人ひとあつばいりせん韓衣かんいのい誰たれも其人そのひと
  
 わらん試こころよいあめ義廉よしかんの刑部けいぶ卿きやう忠盛ちゆせいの男おとこ清盛きよせいハいうハ韓
   
 衣いのいじんいじん大志たいしあり射中いあてて功いさ小ちひく耐外たいがいて恥大ちたく玉たまと箭やは投なじ
   
 ぶとバなごさるべし義朝よしかさ主ぬしハ神氣かみけ動うごやさき人ひと之の精神しんせう一箭いつやの上うへ
  
 鐘かねがじし為な義主よしかぬしハ老おいより為な朝主あそぬしハとさなハ大和やまと河内かふち攝津せつの

源氏多よしかたしつどもはる殿とのよおよむど義廉よしかんの弓ゆみ箭やの誓ちか國くに
  
 歌うたハ敵たかきておろ人ひとはくくわらんど風かぜと貫つらき猿さると泣なはる手て足あしあり
   
 兵庫ひんぐうの頼政たのまさハいよ玉環たまがわをいと聞きて改あらためて低ひかて愁うれふる体ていあり
   
 韓衣かんいハ君きみも顔かほ見み合あせて詞ことばをい義廉よしかんのい嚮むかハ三女さんにょののり
   
 のうちハ新あらたあぶさるあり神かみハ體ていの主ぬしとして體ていハ神かみの寓居うき
  
 世よはあらんハ家のいへ穢けがれと愛あいハ家のいへ壊こわれと悲かなべし死しるものハ既すで主ぬし
  
 の神體かみていの寓居うきと棄すて天地あめつちの正廳せいどうハ歸かへ三女子さんしよの如ごとき未ま徂こハ滞とど
  
 て正房せいぼうハ不ふ歸きとつと廢宅はいたくハ心こころとさめ繩なはと練ねハ繫つなるることとら
   
 え糸いと若わか繩なはと練ねと百年ひゃくねん不ふ朽くハ百年ひゃくねん雙ふた言ごと復かへるなりとんハ韓衣かんいの
   
 幽あや冥みやうのるハ陽間やうかんの人ひと臆おそ度どハあつざるものハあじ古いにしへ人も無な鬼おに論ろんと



い君韓衣玉環三人の七更  
徳罪に陥るるや石川  
義康よ告

長生言巻二



著て命ついでくくぬ近ちかくハ得長壽院とくちやうじゆいんと造つくらせめよも觸ふ腰こしは  
 柳やなぎの生な出て風かぜは打う靡な時とき々帝ていの頭あたま風かぜと病やまでめよりのるくとせ  
 よハののちる小野小町こののこまちが秋あき風かぜの吹ふけつてもあちかかくといひも  
 うまうちるるののハめじと妻つまががつてつてからられりり彼かれ二ふたりハ枯か  
 骨ほねは柳やなぎ薄うす生な出でるとととびびと社やしろいいれ妻つま三人さんにんハ色いろもりり  
 ぬ肉にくは繩なは練ねののくく入いるととむむりり苦くままととおおひひめめりり義ぎ廉れん鬼おに  
 神かみののるる移うつ移うつししるるののめめりり女子にょしとといいどもども鬼おにははむむりりてて鬼おにののるる  
 とと同おなくく鴻わづらひ儒にうはは同おなくくととおおひひめめづづははららはは終はつつつたたややき  
 ううとと東あづま天あま白しろくくととつつつつととありりししひひめめハハままええららせせぬぬ義ぎ廉れんハハ三さん女によのの交まじ  
 怨うらみとと訟しょうとと聞きてて心こころふふくく惨あはれ今いまいいるる形かたちはは變かへともとも既すではは從したが父ちち姉あね妹いもうとの

親おやののりりとといい対たい中ちゆうるとと心こころよよままののびびととままののりりとといいくく度たびもも辞い  
 奉ほうんととととららかからら思おもははららよよとと朝あそ庭ていよりより徴あはららしし使つかりりてて夜  
 ととああてて河か内ないよりより駈かののりり勅しやく命めいととううけけめめれれどどおおひひままううけけたたる  
 りりとといい固かたくく辞い奉ほうるるよよおおひひままとと違ちが勅しやくのの罪つみ業ごうりりららばばとといいく  
 領國りやうこくよよ立たちちりり家いへよよつつじじみみ居いてて勅しやく免めん待まちををままつつ外ほかせんせん方かたとと  
 朝あそ庭ていよよハハいい誰たれ彼かれとと詮せん議ぎままららくくありりししとと遂ついにに兵へい庫こにに願ねが  
 政せいとといいとといいららるるハハ頼たの政せいハハ人ひと皇みかど五いつ十じゆ六ろく代だい清せい和わ帝てい六むのの皇みかど子こ貞  
 純じゆん親しん王わうのの子こ經きやう基き王わう天てん慶けい二に年ねん十じゆ二に月げつ源げん姓せいとと賜たまひひ人ひと臣しんよよ別わかれれしし  
 りり其その子こ伊い守しゆ満まん仲ちゆう其その子こ撰せん津しん守しゆ頼たの光かう其その子こ美み濃のう守しゆ頼たの國こく善  
 子こ三さん河か守しゆ頼たの綱かう其その子こ兵へい庫こ政せい子こ家いへ傳つたへへるる弓ゆみ馬うまのの名なハ

るる歌林うたのくには其名そのな秀代ひでよの勅撰ちやくせんは入る歌うたとてりぞめれば詞花しげ集しゆ  
は二首ふたしゆ千載集せんざいしゆは十四首じゅうしししゆ新古今集しんここんしゆは三首さんしゆ新勅撰集しんちやくせんしゆは三首さんしゆ續  
後撰集ごせんしゆは二首ふたしゆ續古今集じゆくここんしゆは四首よししゆ續拾遺集じゆくしやくいしゆは一首ひとしゆ新後拾遺集しんごしやくいしゆ  
は二首ふたしゆ王業集おうごふしゆは八首はつしゆ續千載集じゆくせんざいしゆは二首ふたしゆ續後拾遺集じゆくごしやくいしゆは二首ふたしゆ風  
雅集がふしゆは十一首じゅういちしゆ新千載集しんせんざいしゆは二首ふたしゆ新拾遺集しんしやくいしゆは二首ふたしゆ新後撰集しんごせんしゆは二  
首ふたしゆ新續古今集しんじゆくここんしゆは四首よししゆは六首むつしゆ時の名流ときのかうりゆうも頼政よりまさのいふ舎しや  
席しやくは趣おもむきありと称なづせらるる其才能そのよめと忌よめりのありて必かならずのやまらぬ  
せん選せんせらるるあへく頼政よりまさのいふむらじより朝廷てうていは武士ぶしと  
おろしハ謀逆ぼうぎやくのど征あつが違勅ちひはつしやくのど伐うんが為ためありと眼めも見えぬ  
變化へんぎ射やふくのり其理そのことわりをまよはせり射やふりともごとし高名たかは

ものじ外ほかさバ命いのち生いまきのる頼政よりまさの者ものけ妖怪やまがひの  
為ためはむめく命いのちとおとく名なをもくごさんるるちやし  
るべく獸けものと率ひらて人ひとと食くせあふ所ところ為ためとやいふべけん  
さしど勅命ちやくめいはバ力ちからは頼政よりまさが命いのちハ今夜このよのちち縮ちぢぬ  
とて徴あかしは應こたへて参内さんないあるれりたる老黨らうたう遠江とんげの國くにの住人ぢゆうじん  
猪俣いのくま太廣直たひろちかは紐糸ぬいいとの腹はら巻まかせて骨喰ほねをくといふ比ひ首くびで  
持もて其身そのみハ朽葉くは色の狩衣かりぎぬは鶴雉つるけいの尾おと以も知しらるるごとり矢  
二筋ふたすぢ重藤ちゆうとうの弓ゆみは取とりて南殿なんでんの大床おほいどはよめられり人の  
りよよごとくは寅とらの刻ときをかりは東三条ひがしさんじょうの森もりの方かたはありて  
震動ちんどうハ電閃でんせんごとく如車輪ごとくるまわたり黒雲くろぐも一朵ひとつぼ立たちおちよは殿でんの上うへ

いかびさてカネ鶯カネの聲カネ二三声カネここゆるやいか。主上近衛帝ハのやかと  
 おびえさせぬ。頼政ハ渦巻雲カネと吃カネとあつまゝさゝるよ。怪カネ  
 き女の涙カネ處不定蜻蛉カネののりあきうよ眼カネも遮カネと南無八  
 幡大菩薩カネと心中カネは祈念カネして弓ハ圓月カネの如くひま  
 ちかりて切てとかせば箭カネハ流星カネの如く遠カネ響カネして雲  
 中カネよ入るよとええしが手ごころして内殿カネの上カネと  
 落カネ着カネて庭上カネよ落カネまるど猪隼カネ太つとありて取て  
 おさへ骨喰カネの匕首カネえ柄カネも拳カネも通カネれとて九刀カネぞ刺カネ  
 ころりくる怪カネべし其瘡カネ口カネより一團カネの陰火カネ飛カネ出て空カネさぬ  
 よのかり。三カネよころれしが女の姿カネまぶらじよええて黒雲カネ

よおのり行方カネも不知カネありまろ。堂上カネ堂下カネ射カネつらや  
 と譽カネる声カネをむしハ鳴カネもまづまゝだ。手カネよく炬火カネ打カネ  
 揮カネてこれとるるよ。改カネハ猿カネ手足カネハ虎尾カネハ蛇カネの如くよて  
 山海經カネよも書カネ不傳カネ画軸カネよもえおよむむ。いふよ名カネでハ  
 頂カネせんとのこまふよ。唱カネ声カネの鶯カネハ似カネらば仮カネよ鶯カネとや呼カネ  
 びえんと頼政カネのいづらよ。やぐて名カネハ空カネりぬ。これより  
 腦カネ頭カネよ愈カネぐれば上皇カネも今上カネも叡感カネのあり。獅子王カネ  
 のへる劔カネで左大臣カネ頼長カネ公カネでめて賜カネりり。頼長カネ公カネ階カネに  
 たり下カネりあふ時カネよ郭公カネ一声カネ名告カネてまぎぐれば  
 郭公カネ名カネでも雲井カネよあぐるう那カネといひけあふ。頼政カネより



あつど 弓なり月のゆるおまうせてとつぎては劔で賜て退  
出づ。彼變化とばうらふ船よのせて流るるるとやみえし。  
鶴ハ萬葉集卷十ハ奴延鳥之裏歎座津卷十七ハ奴要  
鳥能宇良奈氣之都追又卷一ハ奴要子鳥ト歎居者な  
ど詠て彼が声のりかしくうらめしげあると人の哭泣よとて一  
て發詔よもおきたるよおめひめをまれば形こそりくあや  
しきめのよかりよしうら 三人の女の怨魂ころりころれば哭泣  
ころる声のこれハ似るハうらへころり  
按ハ頼政鶴と射ころ年月其説まらしくみしてさだり  
わろど 或ハ後白河帝才一の皇子二条帝平治二年

五月のころと 或ハ同帝才三の皇子高倉帝いころ  
東宮よて五条高倉よまらしくころ 仁安元年四月のころ  
と 鶴の形状と説よも政ハ猿背ハ虎尾ハ狐又蛇足ハ  
狸又熊又軀ハ狸手足ハ虎をど載ころり又二条帝平保  
の頃鶴宮中よ写て宸襟と緇先例よまうせ頼政と徴  
五月廿日あめりすうて 西月のころあるハ鶴とて一声おとつれて  
二声とも啼ざりころり 闇の夜よて形ええざれば大鑄と  
とりて声 ころり内殿の上と射る鶴これハ驚て中天よ  
ひろめきころり次ハ小鑄よて射落ころり 内夜と大炊  
内門右大臣公能公ころりつてとて賜よとて昔の養由ハ雲外

國子鳥羽書卷二

年

の尸と射り。今の教政ハ雨中の鷓と射りと感じ  
 めひて 五月闇名とありハせる今も嘗て那と作られ  
 りれば教政 こそぐれ時もさきぎぬとおひよといわれり  
 とあり。平家物語ハ近衛帝仁平三年二条帝广保年  
 中あなをのりて記せり。後の鷓ハまことの鷓ハおの鶴ハ  
 非鶴鶴ふべし。後代画工の描ところ。猿虎蛇ハ摠て熊狐  
 狸といふものなり。此の猿のこゝろ似しればこそ諸  
 説とがハざりり。其の不肖おしてかべし中よも尾  
 の蛇ハ似るといへるハ蛇尾ハ似するあるべきとや。蛇  
 改画なせるおろろはし。さうハ尾狐ハ似たりとて

尾頭ハ狐の面と画くべきなり。ハ画工の造意証なりと  
 やいもん興ありとやいもん。又宮女菖蒲と湯とけ時  
 のりとし。仲細ハ菖蒲が生ところと記せるあり。菖蒲  
 がるハ無住法師が沙石集ハ頼朝卿京よりあやめと  
 いふこと。美人あるやめ。さうしてうぐさうぐ  
 りと握原三郎兵衛尉所望してえりりれば。同  
 齡の十七八をり。ある女房美人のえもさきぬと十人装  
 束させて双おきてけりちよめやめとえ初り。さうハ  
 湯とけしと作られれば。えさきさきぐさくして  
 まこもさきめさうの沼ハさきさきりめひていづれあやめと

ひきぞつらふといひしうらる時。あやゆりやせありて  
袖せひきつくりひきるとえてあれこそとやてやぐてしぬ  
りりれと載のせしり無住法師むぢうぼうしハ握原にぎはらがやうりのあのかれが  
けりまそまて頼政よりがりのうご籠かごしきまよハ既もとよりひ  
やぶりしる人ありいづれりまそまてなすん

國字鶴物語二の巻終



